

京都基本構想（案）

序 文	1
第一章 京都基本構想策定の背景	3
第一節 世界文化自由都市宣言―世界史を担うまちを目指して	3
第二節 京都市基本構想―21 世紀の到来を見据えて	3
第三節 京都基本構想の策定―「都市の理想」に立ち返って	3
第二章 京都のかたち	5
第一節 悠久 ^{ゆうきゆう} の自然との共生の中で	5
第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり	5
第三節 節度と矜持 ^{きやうじ} に基づくひらかれたまち柄 ^{がら}	6
第四節 世界から敬愛 ^{がくげい} される学藝 ^{がくげい} の府	7
第三章 世界・日本・京都市のいまと未来への課題	9
第一節 人口動態の変化とその影響	9
第二節 日本経済の動向と京都市の産業	9
第三節 環境問題・自然災害の深刻化と自然との関わり ^{きはく} の希薄化	10
第四節 その他の国際的課題	11
第四章 わたしたち京都市民がめざすまち	12
第一節 歴史と文化を介して人間性を回復 ^{かいふく} できるまち	13
(1) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける	13
(2) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける	13
(3) 「夢中」と「感動」に溢れ ^{あふ} 、学び続けられる	14
(4) 平穏 ^{へいおん} と静寂 ^{せいじゃく} のもとで自己と世界に深く向き合える	14
第二節 自然への畏敬 ^{いけい} と感謝の念を抱けるまち	15
(1) 謙虚に自然と関わり続ける	15
(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る	15
第三節 自他の生 ^{せい} をともに肯定し尊重し合えるまち	16
(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く	16
(2) 支え合いの中で日々の生活を営める	16
(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える	17
第五章 京都を生きるわたしたちのこれから	18
未来への問いかけ	20

序文

わたしたち京都市民は、京都市が、
わたしたちと世界中のあらゆる人々にとって、
歴史と文化を介して人間性を恢復^{かいふく}できるまち、
自然への畏敬^{いけい}と感謝の念を抱けるまち、そして、
自他の生^{せい}をともに肯定し尊重し合えるまちであり続けるために、
不断^{ふだん}の努力を重ねていく。

人間は、過去に生かされ、未来を生きている。

京都市は、平安京成立から 1200 年以上の歳月を経て、人類の文明においても稀有^{けう}な
歴史都市・文化都市として世界中の人々から敬愛されるに至った。このまちを重層的
に彩る各時代の史跡も、人間の極致^{きよくち}を体現してきた工藝^{こうげい}や藝道^{げいどう}も、歴史の偉大な産物
であるのみならず、市井^{しせい}の人々の愛着と創意に満ちた日常の尊い軌跡にほかならない。
このまちが今日^{こんにち}に至るまでには、有名・無名を問わない無数の先人たちの献身があっ
たことを、忘れてはならない。

わたしたち京都市民は、これらの人間的遺産^{きやうじゆ}の享受者であるとともに、これらの継
承者でもある。この系譜^あに在ることの意義と幸福^かを噛み締めながら、節度^{きやうじ}と矜持^{あまた}の
もと、先人たちの営為^{えいゐ}の結晶を未来に伝え遺^{のこ}していく責任を果たしていきたい。

人間は、自然に生かされ、自然を生きている。

京都市は、信仰から美意識に至るまでのさまざまな思想を豊かな自然との関係の中
で醸成^{じやうせい}してきた。悠久^{ゆうきゆう}を体現する山々に囲まれ、清らかな水の恵みに満ち溢れたこ
のまちは、自然と人間の根源的な不可分性や一体性を思想的土壌としており、数多^{あまた}の
文化がこの水脈と土壌とに根差している。

わたしたち京都市民は、自然を人間から切り離し客体化してきた過去数世紀^{かえり}を省み、
新たな可能性として、このまちが育んできた自然観一ゆえに、これと不可分な人間観
一を世界に提示していくとともに、他の国・地域や文化圏・思想圏との響創^{きやうそう}のもと、
人間と、人間の営為たる科学や経済、そして自然とが、真に共生する未来に貢献して
いきたい。

人間は、共同体に生かされ、共同体を生きている。

京都市は、短期的・個別的な利益追求が偏重される時勢^{じせい}においてなお、長期的な共栄を希求しながら、今日においては非合理・非効率と評され得るさまざまな人間的つながりを保全してきた。このまちには、地縁や職業のみならず、学事、祭事、稽古事、ひいては名も無きかかわりでつながる彩り豊かな共同体の数々が息づいている。複雑で、繊細で、それゆえに愛おしくもある生身の人間関係こそが、数多のつらなりとかさなりを宿すこのまちを織り成してきた。

わたしたち京都市民は、来る四半世紀^{きた しはんせい き}の間^{あいだ}に、国内外の人口動態の変化、言語の壁の融解、さらには、これらに伴う経済構造や社会規範の変容の中で、地域社会のみならず国際社会の一員として、数多く^{かずおお}のつながりを紡いでいくこととなる。世界中の人々と生み出すこのまちの新たなひろがりにおいて、わたしたちの日常を包んできたあたたかな息遣いのもと、互いの歴史、文化、自然、そして人の在り方^{あ かた}をともに尊重していきながら、人類社会の恒久の平和と共栄を実現していきたい。

第一章 京都基本構想策定の背景

第一節 世界文化自由都市宣言―世界史を担うまちを目指して

「都市は、理想を必要とする」。京都市の最上位の都市理念として 1978 年に策定された世界文化自由都市宣言は、都市の^{しんずい}真髓を宿したこの一文に始まる。当該宣言は、これに続いて、自己の伝統の深い^{しやうさつ}省察、世界の現状の正しい認識、そして、理想の実現に向けた市民の努力によって都市が世界史において大きな役割を果たすと展望し^[1]、永久に新しい文化都市として平和のもとでの自由な世界文化交流の中心を担っていくという京都市の理想を示している。

世界文化自由都市宣言は、この理想の実現に向けた「われわれ市民」の決意を^{せん}宣したものであり、約半世紀を経てなお、わたしたち京都市民に^よ拠^{どころ}り所を与えてくれている。

第二節 京都市基本構想―21 世紀の到来を見据えて

世界文化自由都市宣言で掲げられた理念のもとで、1983 年に市政初となる京都市基本構想が、その後、1999 年には市民の熟議を経て新たな基本構想が、それぞれ策定された。

21 世紀最初の^{しはんせいき}四半世紀を見据えた当該構想は、「わたしたち京都市民」を主語とし、京都市民の根底にある価値観を「めきき」「たくみ」「こころみ」「きわめ」「もてなし」「しまつ」という 6 つの得意技として再確認するとともに、信頼を基礎に市民社会の再構築をめざすというまちづくりの方針を示した。また、誇りと責任感に基づく市民ひとりひとりの市政への積極的な参加を呼びかけたことで、策定の過程での熟議とも相まって、新時代に即した市民主体のまちづくりの土壌となった。

第三節 京都基本構想の策定―「都市の理想」に立ち返って

今般、2011 年の地方自治法の改正によって基本構想の策定義務が廃止されてなお、この後継に相当する本基本構想の策定に至った背景には、2025 年現在においてこそ世界文化自由都市宣言で述べられている「都市の理想」の重要性が一層増しているとい

^[1] 本基本構想は、「自己の伝統の深い省察」を第二章で、「世界の現状の正しい認識」を第三章で、「理想の実現に向けた市民の努力」を第四章と第五章で引き受ける構成とした。

う時代認識と課題意識がある。

1999 年の京都市基本構想の策定から今日^{こんにち}に至るまで、人類は、グローバル化の進展、インターネットや人工知能（A I）技術の普及、気候変動の影響の顕在化、自然災害の^{げきじん}激甚化、感染症の流行、戦争・紛争の発生と継続、さまざまな社会的分断の顕在化、そして、これらに関連する^{あまた}数多の変化を経験してきた。本基本構想は、時勢^{じせい}が複雑化の一途を辿る今日において、世界文化自由都市宣言という都市の理想にいま一度立ち返り、京都市とわたしたち京都市民の今後四半世紀の^あ在り^{かた}方を展望するものであるとともに、京都市基本構想の系譜を未来へと継承するものである。

第二章 京都のかたち

第一節 悠久^{ゆうきゅう}の自然との共生の中で

このまちの歴史は 794 年の平安京の成立以前にまで遡るが、現在の自治体としての京都市は、1889 年の市制特例による成立を経て、1898 年に誕生した。以降、行政区の分合を重ねながら、2005 年に 1200 年前の平安京造営の木材供給も担った旧・京北町との合併を経て、現在の市域となった。人口百数十万人の大都市ながら市域に豊かな森林や農地を有しているという点は、わたしたちの京都市の特徴の一つである。

このまちを生きた先人たちは、悠久を体現する山々を望みながら、鴨川・桂川・琵琶湖疏水から井戸水に至るまでの豊かな水の恵みのもと、人間と自然を不可分で一体的な存在と捉える自然観を思想的土壌として育んできた。食、建築、景観、服飾から藝道^{げいどう} [2] に至るまでのさまざまな生活様式や文化様式が、四季折々の季節感を纏^{まと}いながらこの自然観を宿^こして今日まで根付いており、わたしたち京都市民と京都市にかかわる人々の生^{せい}に彩りを与えてくれている。

過去数世紀^{あいだ}の間、人類社会は、人間と自然を二元論的に切り分けて捉えた上で、自然を支配の対象としてきた。この態度への反作用と反省もあって、21 世紀初頭からは「持続可能な開発」といった考え方が社会的に浸透するに至る。しかしながら、この地では、これらの言葉が社会的に流行する遙^{はる}か以前から、多くの先人たちが人間と自然の不可分性と一体性に基づく共生を志向し、これを体現してきたのである。この自然観は、改めて世界に提示していくに値するだろう。

第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり

このまちは日本史の主要な一角を担ってきたが、その軌跡は決して単一的・直線的なものではなかった。朝廷・幕府といった政治体制、神道・仏教・儒教をはじめとする宗教思想、これらと連関した経済活動などが複雑に絡み合う中で、戦乱等の危機を経てなお文化の力で再建を重ねながら、多層的かつ多元的に織り成されてきた長い歴史の現在地が、わたしたちの京都市である。

このような歴史の重なりの中で成立してきた藝道や武道、工藝^{こうげい}といった文化の根底

[2] 本基本構想では、「芸」（元々の意味は「草を刈り取る」）という漢字ではなく、「藝」（元々の意味は「木や草を植える」）という旧字体を用いている。

には、人間が到達し得る極致^{きよくち}への志向^{みいだ}を見出すことができる。身体と心、自己と他者、人間と自然を本来的に不可分と捉えるその精神性は、茶道や華道、能楽や武道、これらの道具や建築などを經由し、さまざまな生活様式においても体現されてきた。また、これらの文化は、今日にまで名が伝わる名人や職人のみならず、名も無き担い手の創意や、市井^{しせい}の人々の愛着と主体的な努力によって受け継がれてきたことを、忘れてはならない。

こうして育まれてきた歴史と文化の重なりと奥ゆきは、長きにわたり新たな人間関係の端緒^{たんしよ}や基盤となり、そして、この人間関係こそが新たな歴史と文化を創発してきた。京都市の歴史と文化の重なりと奥ゆきは、今日においては軽視されつつある生身のひとの連なりを織り成すとともに、この連なりを過去や未来と不可分なものとして繋いでいる。現在を生きるわたしたち京都市民は、先人たちが紡^{つむ}いできたこのまちの歴史と文化の中を生きているのであり、また、これらを未来へと引き継いでいく責任の中を生きているのである。

第三節 節度^{きようど}と矜持^{がら}に基づくひらかれたまち柄

このまちの歴史と文化は、それぞれの時代と分野とを生きる人々の節度と矜持によって支えられてきた。時流^{ほんろう}に翻弄^{しんずい}されることなく生涯を捧げて伝統の真髓の保全と継承^{じんりよく}に尽力してきた先人たちの矜持は、その作品のみならず景観にまで刻まれ、このまちの空気をつくっている。また、この空気こそが、自分の領分^{わきま}を弁^{きようどう}えながらも協働や響創^{きようそう}【3】を可能とする節度を人々の内に育んできた。この両者に基づき時間をかけて培われる、身体的【4】で、暗黙知^{あんもくち}【5】的で、それゆえに絶妙な間合いとあわい【6】は、表面的な言葉や短期的な経済合理性を超えた人間的信頼の基盤をこのまちに与えてくれている。

【3】 起草にあたっての有識者との議論に基づく造語で、一般的に用いられる「共創」を念頭に、各人の内面から空間ひいてはまち全体にまで自己と他者の相互作用が広がり、深まっていくさまを表現した。

【4】 必ずしも言語や認識を介さない、身体感覚として身肌に刻まれた経験や記憶に根差している状態を意味する。

【5】 言葉で明確に表現または定義されていない、あるいは、されることが至難であるために、言葉を介した知識としては伝達・習得しにくいものを意味する。

【6】 流動性やゆらぎの中で不明瞭かつ不確実な境界から成る間（ま・あいだ）を意味する。

このまちは、伝統を保全するのみならず、先駆や進取の気性と創意工夫に満ちた遊び心によってさまざまな文化や産業を創出してきた。数々の藝道や工藝、和食や日本酒が育まれたのみならず、現代においても、数多くの大学や研究機関が集積する世界有数の学術都市であり、また、市域南部に代表されるように、先端技術産業が集積する産業拠点でもある。これらの創造や探究の基盤を担ってきたのは、節度と矜持に基づくひらかれたまち柄にほかならない。時勢に安直に迎合することなく、それでいて分野や市域を超えて人々と交わりながら新たな創発を追求していく態度は、まさに守破離^{しゅはり}【7】の体現と言えよう。

わたしたち京都市民の日々のくらしもまた、このひらかれたまち柄の中で営まれている。商店街には個性豊かな商店が立ち並び、横目に過ぎ去る、立ち止まって眺め入る、馴染みの店に立ち寄るといった関わり方を自在に見出せる。鴨川の河川敷では、銘々が、歩き、走り、座り、書を読み、水面を眺め、木々に触れるなど、それぞれに時を過ごしている。こういった多彩な人々が互いに適度な距離を保ちながら、微笑みを向け合い、ふとした拍子に言葉を交わし、共通の友人を見つける。このような日常が織り成されるまちが、わたしたちの京都市である。

第四節 世界から敬愛される学藝の府

このまちは、心ある先人たちの尽力のもとで、世界中の人々から敬愛される学術機関や有形・無形の文化遺産を守り育んできた。大学のまち・学生のまちと称され、11名のノーベル賞受賞者が市内の大学で研究に携わった経験を有し、また、15箇所の寺社城がユネスコ世界文化遺産に登録されていることに象徴されるように、わたしたちの京都市は学術と文化・藝術の双方において世界有数の都市、いわば学藝^{がくげい}【8】の府である。

【7】 日本の藝道や武道で広く用いられている、技藝の習得を三段階で説く概念。「守」は形（型）や師の教えを守ることによって基本を身体に染み込ませる段階、「破」はこれらの教えを批判的・懐疑的に破りながら意図的に逸脱する段階、「離」は「守」「破」のいずれの態度からも離れて独自性を獲得し、自在に振る舞えるようになった段階を意味する。

【8】 学術と藝術の総称。京都市においては、両者が極めて多彩かつ重層的に息づいていること、また、異端や辺境とされていたものの受容や外部との交流によって歴史と文化が織り成されてきたことに鑑み、この射程や定義を読者に委ねるべく、意図して明確な規定を差し控えている。

このまちを学藝の府たらしめてきたのは、褒^{ほう}賞^{しょう}や登録の対象となった人々や寺社城のみではない。日夜の稽古に心血を注ぐ師弟、寸分の差に生涯を賭^とす職人、真髓を見定める市井の愛好家といった人々の日常の蓄積こそが、真理の探究や人間の極致の体现を志向するこのまちの学藝を深めてきたのである。学藝を取り巻くこれらの有名・無名の人々、いわば京都学藝衆もまた、わたしたちの京都市が世界に誇るべき人間的遺産にほかならない。

グローバル化とデジタル化の進展を受けて、このまちの学藝とこれを担う学藝衆とが世界とより密接に繋がり始めている。わたしたちの京都市は、悠久の自然、歴史の重なり、文化の奥ゆき、ひとの連なり、節度と矜持、そして、ひらかれたまち柄によって織り成される世界有数の学藝の府として、このまちが守り育んできた学藝と京都学藝衆とを、言語や文化的背景をも超えて、人類社会に広げていくことができる大きな可能性を有している。

第三章 世界・日本・京都市のいまと未来への課題

第一節 人口動態の変化とその影響

21 世紀最初の^{しはんせい}四半世紀にわたって、世界人口は増加の一途を辿ってきた。一方で、この間、国内人口は 2008 年をピークに減少局面に入り、2024 年現在は約 1.2 億人、2050 年代には 1 億人を下回る見込みとなっている。2025 年現在、すでに、内需の縮小、労働力の不足、社会保障費の増大といった影響が顕在化しつつある。

京都市の人口は長らく 147 万人前後で推移してきたが、2010 年代後半から減少局面に突入し、特に就職や結婚・育児などのライフステージの変化に伴う若年層の流出が顕著となっている。この人口動態の変化は、市内各地域における人間関係を弱体化させているのみならず、このまちが長い歴史の中で育んできた住民自治の伝統や支え合いの精神と実践の双方を^{きはく}希薄化させており、孤立・孤独への対応をはじめとする福祉の維持・拡充と、各地域の歴史に根差した行事やこれらを彩る有形・無形の文化の保全が求められている。また、日本有数の大学街である京都市においては、学生数減少の多大な影響も予見されるところであり、まち全体としてのあり方も大きな変容を迫られていくだろう。

第二節 日本経済の動向と京都市の産業

日本経済は、20 世紀末からの不況が尾を引く中でも 2010 年まで GDP 世界第 2 位を維持していたが、人口減少・少子高齢化や成長産業における日本の国際競争力低下などを受けて、2025 年においては GDP で世界第 4 位となった。この間、所得格差の拡大や労働力不足の深刻化、年功序列や終身雇用といった従来の雇用形態の変化、労働時間に関する規制の厳格化、転職や副業・兼業の一般化、女性の社会進出の進展なども見られた。特に 2020 年代に入ってからには人工知能（A I）技術の発達と普及がめざましく、今後の産業及び雇用のあり方への^{じんだい}甚大な影響が予期される。

京都市においても、製造業を中心とする大企業が世界市場で重要な位置を堅持する一方で、このまちの経済はもとより市民のくらしや文化を支えてきた中小企業を含め、労働者・後継者の不足が課題となっている。スタートアップ企業や新規事業の創出・拡大に向けた支援もさまざまに展開されているものの、例えば、大学等での最先端の研究成果の事業化や、文化と市場の適切な接続など、グローバル化とデジタル化の流

れの中で地域に根差しながら未来を担っていく人材を確保・育成していく必要性が年々増している。

京都市を訪れる観光客は過去四半世紀で2割以上増加し、2008年には5,000万人を突破した。2020年からの新型コロナウイルス感染症の流行によって一時的に減少したが、2023年に同水準に戻り、現在は特に海外からの観光客が大幅に増加している。一方で、特定の観光地への訪問客の集中、公共交通機関の混雑、幹線道路の渋滞、文化や生活習慣の違いによるトラブル、伝統的な町並みや商^{あきな}いのあり方の変容など、市民の生活と生業^{なりわい}への悪影響も生じている。京都市の歴史や文化が表面的に消費されていることへの強い懸念も見られるが、今後も国内外から多くの人々の来訪が見込まれる中、歴史や文化の深みや真髓^{しんずい}を多彩な人たちに伝えていく新たな工夫と努力が求められている。他方で、日本社会全体として労働に関する考え方や規制は年々変化を続けており、徒弟制のもとで長年の修行を重ねた上で生涯を捧げることが期待されてきた伝統産業や藝能^{げいのう}における後継者不足への向かい風となってもいる。

第三節 環境問題・自然災害の深刻化と自然との関わりの希薄化

この四半世紀は、世界的に環境問題が一層の顕在化を見た時代でもあった。都市化、都市部への人口集中、気候変動、生物多様性の喪失などに対応するべく、国家の枠組みを超えた地球規模での協力が志向されてきたが、政治・経済・宗教等の差異に由来する限界など、国際協調に向けた課題が顕在化してもいる。

日本においても、農山村の衰退、都市部への人口集中、都市の居住環境の悪化、郊外の里地里山の多面的機能の低下や喪失といった課題が表面化している。また、地震や台風などの自然災害も発生し続けており、防災・減災対策の重要性が高まり続けている。

京都市においても、歴史・文化を支えてきた自然の危機が顕在化してきている。山麓部への都市域拡大、山間地域の過疎高齢化、記録的な豪雨や猛暑日の増加などに加えて、祇園祭の厄除け^{やくよけ}粽^{ちまき}や京料理の敷き^し笹^{ざさ}に使われるチマキザサや葵祭の象徴たるフタバアオイなど、京文化を支えてきた在来種が消失の危機に瀕している。都市部への人口集中をはじめとする社会環境の変化の中で市民の自然への関与が希薄化していき、これに伴い自然環境も変化してきたが、里地里山の劣化が農林水産業の不振と表裏一

体であるように、自然環境の変化は文化や歴史はもちろん産業ひいては市民の日常生活にも着実に影響を与えている。

第四節 その他の国際的課題

2020 年からの新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、身体的・物理的な活動が不可欠な多くの文化を存続の危機に迫りやるとともに、日本を含む世界各国に甚大な経済的損失を与え、多くの事業者が閉業・廃業に追い込まれた。この間、国際機関や国際的枠組みの限界、国家間の経済力・技術力・行政対応能力の格差、ワクチン等の開発や分配にあたっての企業間の競争姿勢などが、随所で顕在化する結果となった。

また、21 世紀を迎えてもなお、戦争や紛争の悲惨は発生・継続しており、特に 2020 年代に入ってから国際社会の緊張感が一層増している。日本、そして京都市は、直接的には戦禍を免れてきたが、戦後長く培ってきた世界各国からの信頼や敬意に基づく相互理解の深化ひいては世界平和への貢献余地が年々高まっている。

2010 年代からは、ESG（環境・社会・企業統治）を重視する投資、SDGs（持続可能な開発目標）、DEI（多様性・公正性・包括性）といった、世界全体での公益追求に向けた包括的な取組も進められてきた。一方で、これらの取組にも課題や限界があり、2025 年現在においては自国第一主義への回帰など反動が見られつつもある。^{きた}来る四半世紀においては、世界全体での人口動態の変化とこれに基づく国際政治・国際経済上の力学構造の変化を見据えて、協調に向けた新たな気運醸成^{じょうせい}と体制構築が求められていくだろう。

第四章 わたしたち京都市民がめざすまち

わたしたちの京都市は、地域に根差す職人や達人、世界を牽引する研究者や技術者、
市井^{しせい}の愛好家、歴史と伝統を背負う家元や名工といった人々の夢中と献身が世界中の
人々の敬意と愛着と交わり、人間関係を織り成しながら人類社会の新たな地平を拓い
てきた、世界有数の学藝^{がくげい}の府である。学術^{がく}、藝術^{げいじゆつ}、そして必ずしもこれらに分類され
ないさまざまな人間的営為^{えいゐ}【9】において真理の探究や伝統の継承と創造に挑む人々の生
き様は、その土壌となった豊かな自然と併せて、世界中の人々から敬愛されている。

これらの人々は、市内の各地域においては、立場や肩書きを超えてこのまちの日常
と非日常をとともに織り成している。子どもたちの登下校を見守り、門掃き^{かどは}をする。災
害や火災に備えて地域を見回り、地域の祭礼に奉仕する。喫茶店や居酒屋で談笑し、
画廊や古書店で語らい、銭湯で湯^あを浴む。そして、こういった取組や商^{あきな}い自体もまた、
このまちの魅力を重層的に支えてきた。

わたしたち京都市民は、このまちのいたるところに根差す学藝のもとで市域ひいて
は時代をも超えてつながるこれらの人々、すなわち京都学藝衆とともに、世界文化自
由都市という都市の理想の体現を通して、人類社会の未来に貢献していく。この際、
近代以降の合理主義の加速化が自然を支配の対象と捉え、環境を破壊し、人間性を
収奪^{しゆうだつ}し、さまざまな社会的分断を生み出してきたことをともに省^{かえり}み、歴史と文化を
介して人間性【10】を恢復^{かいふく}【11】できるまち、自然への畏敬^{いけい}【12】と感謝の念を抱けるまち、
自他^{せい}の生をとともに肯定し尊重し合えるまちを、世界へと提示していく。

【9】 「営み」を指す言葉で、「為」を加えることでより主体的な意味合いを含意する。

【10】 人間の人間たる所以（ゆえん。理由・根拠）、人間らしさのこと。本基本構想では、この射程や定
義を読者に委ねるべく、意図して明確な規定を差し控えている。

【11】 概念的で全人格的（総合的）な次元において元の状態に戻ることに用いられる言葉。なお、「回復」
や「快復」は、一般に健康状態や個別の機能に対して用いられる。

【12】 自分（たち）を超越した存在に対する深い畏（おそ）れと敬意が両立した精神状態を指す。

第一節 歴史と文化を介して人間性を恢復できるまち

(1) 本物（ほんまもん）を追究・創造し続ける

わたしたち京都市民は、先人たちから受け継いできた先義後利^{せんぎこうり}【13】・不易流行^{ふえきりゅうこう}【14】・自利利他^{じりりた}【15】といった思想のもと、短期的な利益のみに囚^{とら}われることなく、年月を賭して自らの技量を熟達させながら、市外の人々とも積極的に連携・協働^{きょうどう}し、また、最先端技術を活用していくことで、世界に類を見ない独自の価値を新たに創造し続けていく。この際、このまちが醸成^{じょうせい}してきた節度と矜持^{きょうじ}のもと、時勢に翻弄^{ひんろう}されることなく本物（ほんまもん）を見極める感性を研ぎ澄まし続け、これを後世と世界とに伝え遺^{のこ}していく。生身の人間同士の信頼関係のもとで切磋琢磨^{せつさたくま}し合うとともに、近隣都市とも協働しながら、本物（ほんまもん）のさまざまなかたちを学び、受け容れ、創り出し、経済ひいてはまち全体の活力の源泉としていく。加えて、このまちの学藝をさまざまに担う京都学藝衆と学域^{がくいき}【16】・地域のつながりを深めることで、この本物（ほんまもん）とこれを見極める感性の次世代への継承・教育の機会を創出するとともに、このつながりを市外ひいては国外に住む人々とも結い合わせながら、学域・地域を持続させていくための土壌としていく。

(2) 世界の文化と交流し、新たな文化を創造し続ける

わたしたち京都市民は、ひらかれたまち柄^{がら}のもとで世界との文化交流を重ねながら、国際社会ひいては人類史をも豊かにする新たな文化を創造し続けていく。グローバル化とデジタル化が進展していくこれからの時代においてこそ、今日^{こんにち}の本物（ほんまもん）もまた進取^{しんしゅ}の気性と創意工夫^{きしょう}に満ちた遊び心^{はっしょう}によって発祥^{はつしょう}を見たこと、加えて、このまちの歴史と文化が時に異端や辺境とされていたものの受容^{じゅうよう}や外部との交流によ

【13】 まずは「義」（人としての義理や道理）を実践していれば、「利」（自分たちの利益）は後からついてくるという考え方。洪沢栄一が儒教の教えに基づき企業倫理の標語として掲げたとされる。

【14】 「不易」（永遠に変わらぬ物事の本質）と「流行」（時代に応じて移りゆく表現）の両者の根本は一つであり、したがって両者の統合が重要であるという考え方。松尾芭蕉が俳諧論において示したとされる。

【15】 自己の「利」（利益、快楽、幸福）と他者の「利」は本来的に一体であり、他者に尽くすことが自己の幸福にもつながるという考え方。元々は仏教の教え。

【16】 一般的な小中学校の学区に加えて、さまざまな学びの場や機会に基づく人間関係を指す。

って織り成されてきたことを忘れることなく、市内の人材がその進取性と遊び心とを最大限に発揮できるように、また、世界中の国や地域から突き抜けた人材を集め、そして輩出していくために、工夫と努力を重ねていく。これらの人材をはじめとする多様で多彩な人々がこのまちと交ざり合う中で生まれる新たな文化を積極的に受容しながら、京都市の多様性と包摂性^{ほうせつ}をさらに高めていき、日本中・世界中の人々から活動の拠点として選ばれるまちにしていく。

(3) 「夢中」と「感動」に溢れ^{あふ}、学び続けられる

わたしたち京都市民は、日々の生活の中に歴史と文化が息づき、多様な個性が受容されてきたこのまちで、自身の生涯を通じて学びたいこと、体得したいこと、夢中になれることを見定めていく。また、人生とまちに対するこのような姿勢を互いに尊重し合い、これをまちの空気としていくことで、市外ひいては国外からも人が集い、夢中が溢れるまちをつくっていく。特に、わたしたちの京都市の未来を担う子どもや若者が、このまちの自然や歴史と文化を通じて豊かで鋭敏な感性を育み、学問から藝術、武道、技藝^{ぎげい}、さらにはスポーツに至るまでのさまざまな物事を個性に応じて追求できるまちであり続ける。加えて、大学や博物館、名勝や史跡、伝統産業から先端産業までもが広く集積することを活かして、まち全体をキャンパスと捉えてこれらを有機的につなぎ合わせながら、年齢、性別、国籍、文化圏などを超えてともに学び合える、夢中と感動に溢れた人生とまちを織り成していく。

(4) 平穏^{へいおん}と静寂^{せいじゃく}のもとで自己と世界に深く向き合える

わたしたち京都市民は、このまちの自然と歴史と文化が醸成してきた平穏と静寂のもと、日々、直向きに自己の在り方^{あ かた}を省み続けるとともに、他者、地域、ひいては国際社会との関わり方を真摯^{しんし}に考え続けていく。このまちが保全してきた深い静謐^{せいひつ}^[17]を後世の京都市民に遺していくのみならず、戦争や紛争の発生・継続、生身の人間関係の弱体化、自然との関わり^{きはく}の希薄化、社会的分断の深刻化といった時勢が世界的に強まり続けていく中でこそ、他国・他地域の人々にとっても、自己と世界とにしずかに深

^[17] 静かで落ち着いているさまを指す。

く向き合えるまちであり続ける。文化を介して人間の人間たる所以^{ゆえん}【18】をともに問い、人間の^{はかな}儚さと^{もろ}脆さ、そして尊さをともに^{ほうよう}抱擁し、わたしたち人類が国境や文化的背景をも超えて互いに尊重し合えることを再確認できるまちであり続けることで、人類社会の恒久の平和と共栄に貢献していく。

第二節 自然への畏敬と感謝の念を抱けるまち

(1) 謙虚に自然と関わり続ける

わたしたち京都市民は、豊かな自然の恵みこそがこのまちの歴史と文化の根底を成してきたことを忘れることなく、自然との共生を志向し続けていく。また、このまちにおけるわたしたち京都市民の四季折々の生活の基盤に自然があること、ひいては、自然こそがわたしたちの生の源泉であることを深く認識し、自然の中を生かされている命のひとつであるという謙虚さのもと、日々の生活と^{なりわい}生業とを営んでいく。

加えて、このような自然観が年々希薄になっていく時勢において、自然との不可分性・一体性を改めて体感し体得できる機会を意識的に創出していくとともに、京都議定書誕生の地としての矜持を保持し、また、^{かね}予てより自然との共生に真摯に取り組んできた人々を積極的に支援しながら、京都市民のみならず人類社会に対しても、この自然観を伝え遺していく。

(2) 災害や感染症などの危機からしなやかに立ち直る

わたしたち京都市民は、このまちが千年以上の歴史の中で培ってきたしなやかさを保ちながら、さまざまな危機に先んじて備え、対応する術を探求し、危機を克服して立ち直ることができるまちをつくっていく。

このまちは、幾度もの戦乱を経験し、そして、その^{つど}都度、復興を遂げてきた。このまちが千年以上にわたり都市機能を^{しゃだん}遮断することなく存続し続けてこられたのは、先人たちの不屈の精神と知恵や工夫、そして、これらを体現し支えてきた文化の力に^よ依る。過去^{しはんせい}四半世紀の^{あいだ}間、わたしたち京都市民もまた、自然災害や感染症の脅威を経験し、立ち直ってきたが、その土台にはこのまちが歴史の中で育んできた重層的なひとつの

【18】 理由や根拠を指す。

ながりがある。地域住民、地域企業、地域団体、市民団体といったさまざまな主体が、それぞれに備え、また、連携・協働し、防災・減災・復興に取り組んでいくとともに、このまちへの愛着と敬意とを、わたしたち京都市民はもとより国内外の人々までもが抱き続けられるよう、自然、歴史と文化、ひとの連なりを守り続けていく。

第三節 自他の生とともに肯定し尊重し合えるまち

(1) 多層的でゆるやかなつながりが続く

わたしたち京都市民は、番組小学校や町内会といった形で先人によって培われてきた住民自治の伝統を継承しつつ、京都市にかかわるあらゆる人々と、趣味、習い事、商い、祭事などを介して、ゆるやかでひらかれたつながりを紡ぎ^{つむ}続けていく。また、互いの肩書きや立場を超えて人間同士として笑みを向け合い、言葉を重ね、酒を酌^くみ交わ^くせる、そういったこのまちの人々の^{すい・いき}粋な在り方を、後世にも伝え遺^くしていく。加えて、市外から通勤・通学する人々から観光客に至るまで、京都市とさまざまな関わり方をしている人たちもまた、わたしたちの京都市の現在を担^かってくれていることに感謝と敬意を抱きながら、多彩なつながりを多層的に織り成^なしていき、誰もが安心と愛着とを抱ける心地よいまちをつくっていく。

(2) 支え合いの中で日々の生活を営める

わたしたち京都市民は、支え合いの福祉を守り、これを広げていくことで、誰ひとり社会から取り残されることなく安心と安全のもとで健康で文化的な生活を営み続けられるまちであり続ける。

このまちは、支える人たちと支えられる人たちが場面や事情に応じて普段から役割を循環させながら、互いに支え合^あって歴史と文化を紡^{つむ}いできた。さまざまな形でこのまちとかかわりを持つことで笑顔や感謝に包まれるのみならず、自分自身もさまざまな形でこのまちに支えられる。地域の人々がともに子どもたちの登下校を見守り、子どもたちの声と笑顔が地域に活力を与える。こうした相互関係の中で、笑顔や感謝がまち全体にまで広がっていくとともに、夜間保育事業など全国的な先駆けとなった取組も進められながら、現在のわたしたちの京都市が育まれてきた。

わたしたち京都市民は、このような社会とのつながりと役割をそれぞれに担いなが

ら、多層的な支え合いの中で、ともに自分らしくあり続けられるまちをつくっていく。

(3) ひとりひとりの個性や価値観を尊重し合える

わたしたち京都市民は、出自^{しゅつじ}や生い立ち^お、年齢、性別、国籍、性自認や性的指向、宗教や信条、身体的・精神的特徴の有無や程度、その他の差異にかかわらず、すべてのひとが個性を発揮し、互いを認め合い、尊重し合いながら、自分の「居場所」と「出番」を見つけて日々を享受^{きやうじゆ}できるまちをつくっていく。この際、国内最初の人権宣言を採択した全国水平社の創立や、福祉事業の全国的な先駆けとなった京都ライトハウス創設をはじめ、京都市の先人たちが実践してきた人権尊重の精神性と先進的な取組とを継承していく。あらゆる個性を互いに受容し、互いを思いやり理解しようとする心を育み、安心・安全のもとで住みたい場所に住むことができる、また、だれもが等しく就労や社会参加の機会を得られ、それぞれが望む生き方や暮らし方を実現できるまちにしていく。

第五章 京都を生きるわたしたちのこれから

第一章で述べたように、本基本構想は、わたしたちの京都市の最上位都市理念たる世界文化自由都市宣言を踏まえてつくられたものである。自己の伝統の深い^{しょうさつ}省察、世界の現状の正しい認識、そして、理想の実現に向けた市民の努力によって都市が世界史において大きな役割を果たすという当該宣言の展望を念頭に、各章でそれぞれについて述べてきた^[19]。特に第四章では、当該宣言で掲げられた、永久に新しい文化都市として平和のもとでの自由な世界文化交流の中心を担っていくという京都市の理想に基づき、京都を生きるわたしたちがめざすまちのすがたとして、歴史と文化を介して人間性を^{かいふく}恢復できるまち、自然への^{いけい}畏敬と感謝の念を抱けるまち、そして、自他の^{せい}生をとともに肯定し尊重し合えるまちの3つを掲げた。

これらのまちのすがたを実現し、京都市がその歴史的・文化的価値の^{ふえん}継承と敷衍^[20]を通して世界史における大きな役割を果たせるかどうかは、京都を生きるわたしたちのこれからの^あ在り^{かた}方に懸かっている。換言すれば、わたしたちは、先人たちから継承したこのまちの歴史と文化を介して、京都市のみならず人類社会の未来にも貢献し得るという幸運と^{じゅうせき}重責の中を生きているのである。

わたしたちがめざすまちのすがたは、市民、行政、市会がそれぞれの役割を果たしながら、ともに^{しんし}真摯に議論と対話を重ね、これを日々の活動に反映し、そしてまた活動の経過や^{きけつ}帰結を新たな議論と対話に反映していくという、^{ふだん}不断の循環の中で実現されていくものである。

市政の主体は、市長や市会議員を選出する、市内に居住する市民が担ってきた。

市長は、市民の想いをもとに市政の方針を示し、行政がこれを実行してきた。

市会は、市民の代表として、市民の声や活動を行政に伝えていくとともに、市長とともに市政の両輪の一つとしての役割を果たしてきた。

他方で、このまちは、市内に居住する京都市民によってのみつくられてきたわけではない。わたしたちの京都市においては、働き、学び、^{いこ}憩うために市外から日々足を運

【19】 脚注 1 再掲：本基本構想は、「自己の伝統の深い省察」を第二章で、「世界の現状の正しい認識」を第三章で、「理想の実現に向けた市民の努力」を第四章と第五章で引き受ける構成とした。

【20】 価値や概念を広げていくことを意味する。

ぶ人々、進学・就職・育児等による転出後も京都市に深い愛着を抱いている人々、かつて観光で訪れた経験のある人々、訪れたことはなくとも京都市に対して憧^{どうけい}憬や敬意を抱いてくれている人々など、さまざまな関わり方を見出すことができる。わたしたちは、京都市がこれらの人々の想いや献身のもとで存立^{そんりつ}していることを、忘れてはならない。

わたしたちがめざすまちのすがたを実現していくためには、従来の市民の枠組^{とら}みに囚われることなく、人生や日常のほんの僅^{わず}かな一部であっても京都市の現在と未来をもにつくっていくこれらの人々、いわば広い意味での京都市民と、より積極的に協働^{きょうどう}していくこと、言い換えれば、多義^{たぎ}的^{【21】}な市民性を促進していくことが不可欠である。また、この際、これらの人々が銘々^{めいめい}において自在に京都市にかかわることができるための設計や、多層的で多彩な帰属意識^{じゅうせい}の醸成と可視化を可能とする取組が求められる。わたしたちの京都市と何らかのかかわりを持った人々が物理的・時間的な隔^{へだ}たりを超えて京都市と関わり続けていける仕組みをデジタル技術も活用しながら構築していくとともに、これらの人々との対話を新たに織り成し、深めていく必要がある。

日本全体で人口減少と少子高齢化が続いていく見込みの中、今後の京都市においても、行政職員数や予算の制約、地縁^{きはく}の希薄化、家族・親族間の扶助^{ふじょ}の縮小など、公・共・私のそれぞれにおいてまちを支える機能が低下していくことが予見される。一方で、これまでの京都市においては、公・共・私のあわい^{【22】}を主体的かつ献身的に支える町内会、市政協力委員、市民団体、有志団体や地域企業、個別の名称を有さない集まりやつながり、そして、これらの団体・活動間の連携や協働こそが、重層的にまちを支えてきた。人的資源や行政機能が徐々に縮小していく未来においては、新たな団体や活動の組成を積極的に促すことはもちろん、これらと既存の取組を有機的に接続していくことが必要となる。

このような姿勢は、節度と矜持^{きやうじ}のもとで世代や公私の別をゆるやかに超えてきた京都市のまち柄^{がら}と通底するものにほかならない。行政は、公務への責任感と誇りを強く

【21】 さまざまな意味を持つ、という意。

【22】 脚注 6 再掲：流動性やゆらぎの中で不明瞭かつ不確実な境界から成る間（ま・あいだ）を意味する。

保持しつつ、公・共・私の垣根を可能な限り低くすることに加えて、このまちで日々の生活を営む居住者たる京都市民と、それぞれの関わり方の濃淡を有する広い意味での京都市民とをつなげ、ともに京都市のまちづくりを担っていけるような設計に^{じんりよく}尽力していく。また、この過程において、あらゆる主体が「居場所」と「出番」を見出し、ひいては、これらを新たに^{きた}つくり出していけるよう協働していくことで、わたしたちの京都市の^{きた}来る千年の歴史のための基盤を構築していく。

未来への問いかけ

世界文化自由都市宣言にもあるように、理想の宣言はやさしく、その実行はむずかしい。しかしながら、このまちは、^{あまた}数多の困難や苦難を乗り越えながら千年以上にわたる時を重ねて、今日のわたしたちの京都にまで自然・歴史・文化・まち柄を継承してきた。

京都を生きるわたしたちもまた、現在そして未来において、数多の課題と向き合っていくこととなる。利便性や快適性を追求する技術革新が人間同士の生身のつながりを^{しゅうだつ}収奪あるいは再定義していく中で、両者の^{きんこう}均衡をどう見定め、どう実現していくのか^[23]。人口動態の変化を見据えて、どのように共同体や産業のあり方を再設計し、また、どのように創発を促進していくのか。観光客が増加を続けていく中で、わたしたちの生活や^{なりわい}生業と観光産業をどのように調和させ、伝統的な町並みや^{あきな}商いに支えられているまちの魅力や活力の向上につなげていくのか。少子高齢化をはじめとする社会的要因で支援・ケアを必要とする人が増え続けつつも支援やケアを担う人材が減少していく見込みであるところ、^{びじれいく}美辞麗句に^{とど}止まらないかたちで、どのように誰ひとり取り残さないまちを築いていくのか。わたしたちの日々の営みは、このまちの歴史と文化を体現し継承していくという責任を果たしているのか。政策や市民活動が、直近の^{じせい}時勢や目先の課題にのみ囚われたものでなく、このまちが守り育んできた価値観や思想に^{りつきやく}立脚できているか。わたしたちの京都が、このまちの千年の歴史に対して、ひい

【23】例えば、意思疎通の非対面化や言語表現の簡素化・単純化を推し進めていく類の技術潮流及び社会潮流が、長い時を経てこのまちに深く根差した身体的で暗黙知的な人間関係のあり方を大きく変容させる可能性があり、また、この変容が地域社会の存続から伝統の継承に至るまでのさまざまな側面に甚大な影響を与えていくことが予見される。

ては、これから千年先の未来に対して、胸を張れるものであるか。

この京都基本構想は、このまちが千年以上もの歴史の中で醸成してきた価値観や思想を確認した上で、世界と日本、そして京都市の現状を踏まえて、これからのまちづくりのあり方を展望したものである。しかしながら、本基本構想は、あくまで、京都を生きるわたしたちの在り方を考えるにあたっての拠^より所^{どころ}に過ぎず、したがって、今後^{しはんせい}四半世紀の京都の未来は、わたしたち自身がこれからつくっていくものにほかならない。本基本構想を土台として、わたしたちひとりひとりが、上記した問いはもちろん、時代に即した新たな問いをも自ら見出し、毎日の暮らしの中で考え続け、不断に議論と対話を重ねながら、複雑で繊細な現実の中でなお直向^{ひたむ}きに具体化していく必要がある。そして、この過程においてこそ、京都が日本中ひいては世界中の人々に敬愛され、人類社会の未来の一端をも担っていく、すなわち、世界文化自由都市として世界史において大きな役割を果たすという都市の理想が実現されていくはずである。

京都を生きるわたしたちは、このまちが長きにわたり醸成し保全してきた人間的遺産^{きやうじゆ}の享受者であり、継承者でもある。この意義と幸福を日々^か噛み締め、世界文化自由都市という都市の理想の実現を希求し、京都そしてわたしたち自身の在り方を世界とともに不断に問い続けながら生を享受し継承していくことを、ここに改めて静かに決意して^{【24】}、この京都基本構想を結ぶ。

【24】 世界文化自由都市宣言の末尾の一文（もとより、理想の宣言はやさしく、その実行はむずかしい。われわれ市民は、ここに高い理想に向かって進み出ることを静かに決意して、これを誓うものである。）を踏まえたもの。